

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【茨城県】

1 実践テーマ	【 V 】
2 実施対象者	茨城県立水戸聾学校 児童、生徒 67名 教職員 53名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 () ② 行事名 (オリンピック・パラリンピック教育推進事業 講演会) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 聴覚障害者の世界大会であるデフリンピック卓球金メダリストと卓球を体験することにより、競技への興味関心を深めると共にスポーツ機運を高め、生涯にわたってスポーツに親しむ心の育成を図る。 ・ 体験談を通して、目標をもつこと、努力すること、人を思いやる気持ちの大切さを学び、今後の学校生活に活かすことができる。
5 取組内容	<p>デフリンピックの元日本代表選手であり、金メダリストの上田萌氏に「努力は裏切らない」をテーマに講演、実技指導をしていただいた。</p> <p>講演では、上田氏が口話と手話を併せて話し、スクリーンに文字情報を提示していただいた。</p> <p>また、映像を視聴する際、手話通訳者がナレーションなどの通訳を行った。</p> <p>(1) 映像の視聴</p> <p>金メダルを獲得したデフリンピックの前回大会で、上田氏はあと一歩のところまで金メダルを逃した。それからの4年間、挫折や葛藤を繰り返し、家族の支えのもとで、念願の金メダルを獲得するまでの映像を視聴した。</p> <p>児童生徒は食い入るように視聴し最後の金メダルと獲得したシーンでは、一堂に歓声をあげ、拍手を送るなど、とても盛り上がった。</p>



(2) 講演

2人の兄と1人の弟がおり、1番上の兄と上田氏が高度感音性難聴であること、生後10ヶ月で高度感音性難聴と診断されたという内容から講演が始まった。

卓球を始めるきっかけとなったのが、福原愛選手のラリーをしている姿が会話しているように見えたことで、「卓球を通じて友達とたくさんお話がしたい」と強く思ったことであることを話していただいた。

全国大会で入賞するようになってから、耳が聞こえない卓球選手として注目されるようになったことや、高校時代会話の内容が分からなくても愛想笑いをしてごまかしていたなどの思春期の悩みや辛さなどを話していただき、競技生活だけでなく、聴覚に障害があるが故の困難さを世界で活躍した選手から聞くことができ、生徒は「同じ悩みをもっていた」と雲の上の存在が身近に感じられたようである。

5歳から卓球を始め18年間の卓球生活を経て、聴覚障害という壁にぶつかりながらも、努力を積み重ねることの大切さや嫌なことや辛いことも含めて、出会いは大切であるということをお話してくれた。

(3) 実技指導

実技指導では、小学部、中学部、高等部、卓球部と年齢や卓球の経験に応じて行った。上田氏の打った球を打ち返したり、ラリーを楽しんだり、上田氏の現役時代得意としていたサーブを受けたりと、卓球に親しむことや憧れの選手と対戦することができて、児童生徒の表情はとてもいきいきとしていた。また、実技指導後の質疑応答では技術的なことや試合前の心構えなど真剣に質問する様子が見られた。



<p>6 主な成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 本校児童生徒と同じ聴覚に障害を有する方が、講師となり、生い立ちから健聴者とのコミュニケーションの困難さ、自分の思いや考えを相手に伝えることの大切さなどの講話を聞くことで物事を前向きに捉えることの大切さを知ることができた。特に高等部の生徒は、卒業後の自分に不安を抱いている生徒が多く、今回の講演でよいアドバイスをいただくことができた。 • デフリンピックの金メダリストと卓球を行うことで、有意義な時間を過ごすことができた。また、卓球への興味関心が高まり、卓球のラケットやボールに触れる機会が多くなった。卓球部の生徒に上田氏のサーブについて質問すると、「ボールの回転が今まで対戦した相手と違い返すのがとても難しかった」との答えから、普段ではできない貴重な経験をしたことが分かる。 • 上田氏に質問をした生徒は、「卒業した後は、健聴者の野球チームに入って野球をやりたい。」「上田氏のように健聴者と聴覚障害者どちらのチームでもプレーできるようにコミュニケーション力を高めていきたい」と述べ、今回の講演会で自分なりのアイデンティティをもつことができたようだ。 • 昨年度からオリンピック・パラリンピック推進事業に取り組んだことで、オリンピック・パラリンピックだけでなく、聴覚障害者のオリンピックと位置付けられているデフリンピックの理解啓発ができた。
<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 聴覚からの情報が入りづらい本校の児童生徒へ、視覚情報や手話通訳などの情報保障を行った。 • デフリンピック金メダリストの話を聞いたり、デモンストレーションを間近で見たりすることで、デフリンピックや卓球への興味関心を高められるようにした。 • 聴覚に障害があっても高い目標がもてるようにした。同じ障害を有する上田氏の経験を聞いたり一緒に卓球をとおして触れ合ったりする機会をもつけ、金メダリストが身近な存在になるようにした。
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 講師との連絡手段がメールのみだったため、綿密な打ち合わせができなかった。しかし、講師が臨機応変に対応してくれたため、スムーズに実施できた。情報の提供方法において課題が残った。 • デフリンピックの理解啓発を行う中で、小学部、中学部、高等部と系統立てた事前学習を行っていくことが、今後の課題としてあげられる。
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<ul style="list-style-type: none"> • オリンピック・パラリンピック推進事業でデフリンピアン招聘を認めていただいたことで、児童生徒のオリンピック・パラリンピックだけでなくデフリンピックの理解啓発を行うことができた。今後もオリンピック・パラリンピックと並行してデフリンピックへの意識が高められると、今回の卓球だけでなく、他の種目のデフリンピアンを講師として招き、本校児童生徒の競技レベルの向上と豊かなスポーツライフの基礎を築く良い機会となりうる事が考えられる。